

“A Fulfilled Woman, a Wife and Mother” ? : William Golding の The Pyramid における女性

Taniguchi Hideko
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355848>

出版情報 : 英語英文学論叢. 45, pp. 51-63, 1995-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

“A Fulfilled Woman, a Wife and Mother”?:

William Golding の *The Pyramid* における女性

谷口 秀子

I

『ピラミッド』(*The Pyramid*)¹⁾には、ゴールディング (Golding) の作品にしては多くの女性が登場する。この小説における女性登場人物の描き方について特筆すべきことは、苦悩する女性として作品の中でかなりの比重を占めるエヴィー (Evie) や バウンス (Bounce) と、イモージェン (Imogen) をはじめとする他の女性登場人物との間に、明らかに大きな設定の差異が存在するという点である。

『ピラミッド』は、主人公であるオリヴァー (Oliver) が中年になって青春を振り返るという設定の「語り」によって展開する三部構成の小説であり、²⁾ 第一部のオリヴァーとエヴィーの関係が、第二部のオリヴァーとエヴリン (Evelyn) との場面で半ば喜劇的に受け継がれ、第三部のヘンリー (Henry) とバウンスの関係において結論付けられるという仕組みになっている。³⁾ ここで、エヴィー、エヴリン、バウンスの三者は、それぞれ、パラレルな存在として描かれており、因襲的な社会の中で苦悩する人間としての共通点を有する。

エヴィーは、スラムに住む若い女性であり、その社会的位置の低さと過度

1) 小論中の『ピラミッド』からの引用は、すべて、以下の版により、本文中に頁数のみを記す。William Golding, *The Pyramid* (1967; rpt. London: Faber, 1983).

2) ゴールディングは、1981年の対談で、『ピラミッド』はソナタ形式ののっとなっていると述べている。 (“An Interview with William Golding,” *The Twentieth Century Literature*, 28. No. 2 (1982), p. 153.)

3) 『ピラミッド』は、それぞれ独立し完結してはいるものの、密接に関連性を持った三つの部分から成り立っている。小論では、これらの各部分を、便宜的に第一部、第二部、第三部と称する。また、この作品の大きな主題の一つは、主人公であり語り手でもあるオリヴァーの「自己認識」であるが、小論ではこれについては論じない。

の性的魅力のために、若き日のオリヴァーをはじめとするスティルボーン (Stilbourne) の男性たちに戯れの性の対象として利用される。一方、バウンスは、高い社会階級に属する富裕な資産家ではあるが、女性としての魅力に欠けるため、やはり、エヴィー同様、誰からも恋愛や結婚の対象とは見なされず、オリヴァーのミラーイメージと言うべきヘンリーに金銭を搾取され、精神を病み、深い孤独のうちに一生を終える。

エヴリンは、エヴィーを傷つけたオリヴァーの「鈍感さ」⁴⁾を再提示するために設定された登場人物であり、その名前や容貌の類似から、エヴィーを念頭において創造されていることは疑いが無い。同性愛者である彼は、一見、エヴィーのパロディー的な面を持つ滑稽な登場人物としてのみ描かれているように見える。しかし、エヴリンは男性ではあるが内面は女性であり、そして、本当の女性ではないため愛する男性に本気で愛されることがないという意味で、エヴィーやバウンスと同じ範疇に入れることが出来ると思われる。⁵⁾

このようなエヴィーやバウンスという主要な登場人物以外の女性としては、オリヴァーが理想化し、エヴィーとは対極の「聖なる」(“sacred,” p. 16) 存在として憧れるイモージェンをはじめとして、ヘンリーの妻、小説の終り近くで極く軽く言及されるオリヴァーの妻(彼女には、台詞がないばかりではなく、名前すらなく、容貌や性格の描写も皆無である)、そして、スティルボーンの因襲性や閉鎖性を映し出す鏡としてのオリヴァーの母らがあげられる。彼女たちは、エヴィーやバウンスの場合とは異なり、その内面的な葛藤や苦

4) オリヴァーの「鈍感さ」は、第二部においては、彼がエヴリンが同性愛者であることを見抜けないことによって滑稽に示される。しかし、オリヴァーの「鈍感さ」は、彼が自己を正当化し自らの罪の意識から逃れるために装ったものに他ならない。(谷口秀子「*The Pyramid*における Oliver の語り」、『英語・英文学研究の再構築』(九州大学出版会、1993)、pp. 283-300. 参照。)

5) エヴリンの「女性的な」面は、容貌や仕草などの外面的な描写や、オリヴァーへの関心、また、オリヴァーが理想化しているイモージェンへの嫉妬の混じったような辛辣な批判などによく表れている。さらに、彼の、“By what Mr. Shaw calls ‘The woman in myself’. I have a great deal of woman in me, Oliver.”(p. 145)という言葉や、“I want the *truth* of things. But there’s nowhere to find it.”(p. 148)というオリヴァーの訴えに応じて、エヴリンが“perceptive”(p. 148)という言葉とともに提示した自分の女装写真は、エヴリンの内に存在する女性という真実を象徴的に表している。また、彼はオリヴァーに興味を抱くが、「真実の提示」として差し出した自分の女装写真を軽く笑い飛ばされたために深く傷つき泥酔する。

悩が描かれることはなく、極めてフラットな登場人物になっている。すなわち、彼女たちは、作品の中で、少なくとも表面上は、悩むことも傷つくこともなく、因襲的な社会の不条理に苦しむこともないのである。

II

『ピラミッド』におけるエヴィーやバウンスという主要な女性登場人物とその周辺に描かれる女性たちの設定の特徴を比較すると表1のようになる。

表1 エヴィー、バウンスと他の女性との対比

	エヴィー、バウンス	その他の女性
結 婚	未婚	既婚
子 供	なし	あり(イモジェンについては不明)
仕 事	あり	なし
年 齢	若い(エヴィー) 青年～老年(バウンス)	若い(イモジェン) 中年以上(その他の女性)
男 性 に	利用され、食い物にされる	利用されない、食い物にされない
悲 劇 性	感じられる	感じられない
描 写	内的な葛藤を感じさせる	内面は描写されない

上の比較で顕著なのは、この作品において、自分さえ良ければと考えて階級の梯子を昇ろうとする利己的な主人公らの犠牲となり苦悩する女性は、仕事を持った、独身の(あるいは、作品中の男性登場人物から結婚の対象として考えられにくい)女性として設定されているということである。それに対して、その他の女性は、仕事を持たない専業主婦であり、そのほとんどは子供を持っているという設定になっている点も注目し値する。(イモジェンについては子供の有無は不明であるが、第二部での彼女はまだ結婚して日も浅く、

将来母となる見込みを十分に有している。)

さらに、苦悩する女性とその他の女性の違いは、上に述べた設定に関することにとどまらず、語りの中に反映される主人公の態度および考え方の違いにも表れている。表2は、階級の違いを理由にオリヴァーが対極に位置すると考えているエヴィーとイモジェンの設定や描写を比較したものである。

表2 エヴィーとイモジェンの対比

	エ ヴ ィ ー	イ モ ジ ェ ン
名 前	旧約聖書のイヴを連想させる (男性を誘惑し、性的に墮落させる女性)	シェイクスピアの『シンペリン』 中のイモジェン (貞淑で美しい 理想的な女性)
容 貌	美しい、性的魅力あり	美しい
結 婚	作品の中ではなし (将来も否 定的?)	既婚
仕 事	あり	なし
階 級	低い	高い
経済状況	貧困	裕福
音 楽	好き、上手	下手
社 会 観	偽善性を訴える	無批判、社会に安住
年 齢	若い	若い
オリヴァーによる 形 容	世俗的(secular)、手に入れや すい物(the accessible thing), 墮ちた女性(fallen woman), 人生の便所(life's lavatory)	聖なる (sacred)
オリヴァーの態度	性的関係を強要	理想化、片思い、失恋の苦しみ
オリヴァーの発見する「真実」	清らかになろうともがいている	感受性が鈍い、愚かで見栄っ張り

表2で注目すべきなのは、自分より上の階級に属するイモジェンに対しては聖なる女性として理想化し、自分よりは下の階級のエヴィーに対しては「墮ちた女性」とみなして軽蔑の混じった性的好奇心を抱くというオリヴァーの階級意識にとらわれた考え方や態度が、二人の名前が象徴する女性のイメージと重なり合う点である。もちろん、オリヴァーは、後の「真実の提示」の場面で、エヴィーが実は清らかになろうともがいており、苦しみから抜け出したいと思っていることを知り、さらに、理想的な女性だと思っていたイモジェンの感受性のない、愚かで見栄っ張りな姿を見て、自分の因襲にとらわれた見方を修正する。しかし、これは彼の「鈍感さ」同様、自己正当化のために装われたレトリックとしての「認識の深まり」を提示するための道具として使われているにすぎず、苦しむ女性と苦しまない女性の間の色分けを修正するものではない。そして、たとえ、その名前が内面に隠された真実を被い隠すための作者の意図的な選択であったとしても、男性が憧れる神聖な女性と男性を墮落させる墮ちた女性という二つの型の女性を連想させる名前が用いられていることは大変興味深い。

III

『ピラミッド』における女性登場人物の明白な二極分化の手がかりは、以下のオリヴァーの言葉の中に見い出すことが出来る。

My daughter nuzzled into my trouser leg, away from the square woman [Bounce] with the slablike cheeks. I put my hand through her hair, feeling the fragility of her head and neck; and a great surge of love came over me, protection, compassion, and the fierce determination that she should never know such lost solemnity but be *a fulfilled woman, a wife and mother*. (p. 212) (イタリックは筆者)

これは、ヘンリーの歓心をかうために求められるままに金銭を与え続け、それでも愛を得られないバウンスの人間不信に陥った孤独な老後を目のあたりにして、オリヴァーが抱いた偽らざる気持ちである。ここには、エヴィーと

パラレルになっているバウンスが陥っている現在の状況は、エヴィーに対する自分の非人間的な行為の罪を告発するものともなっているにもかかわらず、娘にはバウンスのような苦悩を味合わせたくないと感じるオリヴァーの強烈な利己主義が露わになっている。

しかしながら、ここでさらに重要なのは、上の引用が、女性にとっての充足とは妻であり母であることのみであるかのような一面的で因襲に縛られた女性観の表明であるということである。しかも、このような女性観が、登場人物であるオリヴァーのみでなく、作者ゴールディングの意識の奥底にも存在していて、彼の女性登場人物の設定に大きな影響を与えていると思われる。すなわち、先に述べた『ピラミッド』における女性の登場人物のグループ分けは、オリヴァーの言うところの妻であり母である「充ち足りた女性」(“a fulfilled woman, a wife and mother”)である(または、ありうる)か否かという区別に基づいたものに他ならない。そして、この小説の女性登場人物の中で悲劇を背負って虐げられ苦悩するのは、必ず、エヴィーやバウンスのような、家庭の妻でも母でもない、「充ち足りた女性」ではない女性の方なのである。⁶⁾

IV

ゴールディングが抱えている苦悩する女性のイメージは、エヴィーとバウンスを比較検討することによって一層明らかになる。エヴィーとバウンスは、恋愛や結婚の対象とならず、男性に都合良く利用される女性として互いにパラレルの関係になっており、バウンスに対するヘンリーの利己的な行為が、エヴィーに対するオリヴァーの自分さえ良ければという自己中心的な行為の非人間性を雄弁に物語る仕掛けになっている。⁷⁾ 表3は、エヴィーとバウンスの設定を対比したものである。

6) エヴリンは、男性ではあるが、この「充ち足りた女性」ではない女性という範疇に入れることが出来る。彼は内面は女性であっても伝統的な価値観に基づく妻にも母にも(夫にも父にも)なることのない存在だからである。

7) 拙論「*The Pyramid*における Oliver の語り」, pp. 291-296. 参照。

表3 エヴィーとバウンスの対比

	エ ヴ ィ ー	バ ウ ン ス
容 貌	美しい (長い睫毛)	美しくない(むしろ男性的) (睫毛がない, 黄色い肌)
魅 力	性的魅力に溢れる	性的魅力に欠ける
仕草など	コケティッシュ	女性というより男性的
歩 き 方	滑べるよう	飛び跳ねるよう
服 装	女性らしい	地味
階 級	低い	高い
経済状況	貧しい	裕福, 資産家
音 楽	上手で好きだが, 貧しいために途中でやめる	好きではないが, 父親に強要されて音楽の教師となる
結 婚*	未婚	未婚
子 供*	なし	なし
仕 事*	あり	あり
男性に利用されるもの	身体	財産
苦しみに対して	最初は受身だが, 後で, 抜け出すべく行動を起こす	常に受身, 精神を病む
結 末	ロンドンへ	孤独のうちの死

上の表でも明らかなように、バウンスはエヴィーをちょうど裏返しにして創造されており、そのために一層二人がパラレルであることが読者に印象付けられることになる。しかしながら、ゴールディングが二人の設定を表裏の関係にする時に、上の表で*を付けた項目、すなわち、独身であり、仕事を持っていることについては裏返しにしていない点は、注目に値すると思われる。つまり、エヴィーとパラレルになる女性として、主人公のミラーイメージである男性登場人物に利用され食物にされて苦悩する女性を設定する時に、

作者は、エヴィーの、仕事を持ち結婚しない女性という特質を裏返しにして、妻であり母であるという「充ち足りた女性」に変えることには思い至らなかったと思われる。例えば、エヴィーの平行であり裏返しであるという意味では、因襲的な社会の中で誰からも愛されず、男性に利用され、虐げられ、苦しめられる人物を、夫も子供もある家庭の主婦として設定してもよかつたはずである。ゴールディングがそうしなかった理由は、意識的にしろ、無意識的にしろ、彼が、「充ち足りた女性」でない（あるいは、「充ち足りた女性」になりそうにない）ということこそが、悲劇的な女性の条件であるとみなしているからではないかと考えられる。

『ピラミッド』の数年前に出版された『自由な墜落』(*Free Fall*)と『尖塔』(*The Spire*)の中の悲劇的な女性たちも、やはり、「充ち足りた女性」ではない。『自由な墜落』のビアトリス (Beatrice) は、エヴィーとバウンスを足して二で割ったような女性であり、元来、教師を志す女性であったが、主人公であり、語り手でもあるサミー (Sammy) にもて遊ばれて棄てられたため、バウンスと同じく精神を病む。また、『尖塔』のグッディー (Goody) は、夫のいる女性であるが、夫が原因で子供がなく、そのことが、夫婦の苦悩の原因となり、悲劇の引金となっている。作者は、結婚してはいても子供を産むことのない女性を、エヴィーやバウンスやビアトリスのような結婚しない女性と同様、「充ち足りた女性」ではないとみなし、悲劇的な女性に作り上げているのであり、このような、女性の充足や幸せを結婚して次世代を担う子供を産むことのみ限定しがちな傾向がゴールディングの作品にはしばしば見られるのである。⁸⁾

V

『ピラミッド』や『自由な墜落』において顕著のように、ゴールディングの小説における女性登場人物は、語り手である男性主人公が自らの「精神的成長」を振り返る過程で、その女性が主人公にとってどういう役割を担ってい

8) 子供を産むことのみが女性の価値の証明であるかのようなこだわりは、短編「クロンク・クロンク」("Clonk Clonk")の中で顕著である。See Golding, "Clonk Clonk," *The Scorpion God* (1956; rpt. London: Faber, 1983).

るかという視点からのみ描かれる。つまり、ゴールディングにとって、女性の登場人物は、主人公である男性との関わりにおいてのみ重要なのであって、彼は、女性を独立した一人の登場人物として扱ひ男性登場人物の描写に見られるような「普遍的な」人間としての苦悩を描くことはないのである。いわば、女性は、『自由な墜落』のサミーにとっての帽子,⁹⁾ すなわち、一人の男性がいろいろな思いを込めて自らの人生を振り返る時に、人生という廊下のその時々にかかっている帽子のようなものである。

さらに言えば、『ピラミッド』をはじめとするゴールディングの作品において、主たる男性登場人物の苦悩は多種多様であり、その多くは人間性の問題へと普遍化を試みられている一方、女性登場人物の苦悩の描写は極めて一面的である。つまり、女性の登場人物の苦しみは男性との関わりにおいてのみもたらされるのである。そのため、妻でも母でもないという状態、すなわち、「充ち足りた女性」でないこと、または、「充ち足りた女性」になる見込みのないことが、女性の間人としての苦悩の象徴として用いられている。言い換えれば、「充ち足りた女性」ではないことが、女性の苦悩の唯一の原因であり、同時に、唯一の結果であると考えられているように思われる。つまり、エヴィーやバウンスは、すでに始めの設定の段階から、それぞれ、階級の著しい低さや女性としての魅力の欠如を理由に、「充ち足りた女性」になる可能性の低い存在として創造されている。このような設定の彼女たちは、男性の愛情を期待して、オリヴァーやヘンリーの言うがままに利用され、その結果、彼らの利己主義の犠牲となり、苦悩することとなる。彼女らが陥る苦境は、結果として、バウンスの場合に明らかのように、やはり、「充ち足りた女性」になることがないということに象徴的に集約される。エヴィーは作品の途中から姿を消すため、彼女の将来については明らかではないが、ロンドンから一時帰郷したエヴィーの描写は、彼女が因襲的な意味での妻であり母である女性になる可能性の低いことを暗示している。¹⁰⁾ このように、ゴールディングは、苦悩する女性を「充ち足りた女性」ではない存在として設定し、

9) Golding, *Free Fall* (1959; rpt. London: Faber, 1983), p. 6.

10) Dickson は、エヴィーがロンドンで売春婦のような生活をしていると断じている。それは極論であるにしても、彼女の発言や描写は、やはり、彼女が、男性に戯れの愛の対象として扱われていることを示唆している。See L. L. Dickson, *The Modern Allegories of William Golding* (Tampa: University of South Florida Press, 1990), p. 104.

そのことに起因する苦悩の結果を、彼女たちが「充ち足りた女性」になりえないことに具現化している。ここに見られるのは、女性が苦しむのは「充ち足りた女性」ではないためであり、また、同時に、女性の苦しみの結果は、「充ち足りた女性」になりえないことであるという、いわば、堂々回りの固定化した概念であり、このことが、彼女の女性登場人物の設定に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

民話、文学、絵画などにおける女性像が、男性の作り上げた「魔女」と「聖女」という二つのステレオタイプに分けられてきたという指摘はよく行われるところである。例えば、多くの民話におけるように、女性は、男性の行く手を阻む存在（魔女）として、あるいは、男性が追い求める名誉の勲章（聖女）として、男性主人公の冒険を彩るために用いられている。また、男性作家の小説の中で、女性は、男性主人公の社会的成功の妨げになる女性と、男性が社会的成功のために追い求め、結婚しようとする女性に区別されていることがしばしばある。ここにも、やはり、「魔女」と「聖女」という区別の片鱗が見られる。ゴールディングの描く苦しむ女性とそれ以外の女性との間に「充ち足りた女性」ではない女性と「充ち足りた女性」という明らかな設定の区別が存在するのは、上の伝統的な女性の二つのステレオタイプの存在と全く無縁ではあるまい。もちろん、民話の中での「魔女」の扱いとは違い、ゴールディングは、決して「充ち足りた女性」ではない女性たちに悪意や敵意を持っているのではない。むしろ、社会の闇を覗き込んだ彼女たちを同情と哀れみの感情を込めて描いている。また、同時に、社会の中で安穩として何の疑いもなく日々を過ごしているスティルボーンの「充ち足りた女性」たちに手放しの賞賛を与えているのでもない。（このことは、第二部で明らかになるイモジェンの見栄っ張りで鈍感な女性という真実に端的に表れている。）しかしながら、それでもなお、苦しむ女性として常に「充ち足りた女性」ではない女性を選んだという点に、男性作家としての彼の女性観が無意識のうちに反映されていると言えよう。

*

*

*

『ピラミッド』は、ゴールディングの女性登場人物の特徴をよく表した小説である。エヴィーやバウンスは、それ以前の、ビアトリスやグッディーという苦境に立つ女性の延長線上にあるが、ゴールディングの女性の中でも出

色の出来と言える。苦悩する女性たちはすべて、「充ち足りた女性」ではない存在として設定されており、苦境にあっても常に受け身であり、自分の置かれた状況を自ら変えようとはしない。しかし、エヴィーは、オリヴァーに何度も関係を強要され、妊娠の疑いが生じたのを契機に、オリヴァーが自分のことを愛していないことや責任を取って結婚するつもりがないことを痛感し、二人の関係をオリヴァーの父に目撃させることによって関係を断ち切り、町の外へと出て行く。そして、エヴィーはロンドンから一時戻った時に、偶然再会したオリヴァーがかつて自分を強姦したことを人のいる前で告発しさえする。エヴィーがロンドンで幸せになったかどうかは明らかではないが、いずれにしても、彼女が、バウンス、ビアトリス、グッディーとは違い、自分が陥っている苦境からの脱出を試みて積極的な行動を起こす唯一の女性であることには大きな意味がある。つまり、彼女は、自らの行動によって変化を起こそうとする女性であり、ゴールディングの創造した苦悩する女性の設定の域は抜け出していないものの、苦悩から抜け出すために積極的に行動する新たな女性登場人物の萌芽となりうる女性である。『ピラミッド』以後の作品の中でゴールディングの描く女性像がどのように変化していくのかについては、別稿で論じる予定である。